

V208b 京都大学飛騨天文台 60cm 反射望遠鏡観測に向けた整備状況

木村剛一, 一本潔, 大辻賢一 (京都大学), 萩野正興, 大屋真, 小林行泰 (国立天文台), 宮良碧, 野澤恵 (茨城大学), 遠藤くるみ, 石塚千彬, 浜屋ひかり, 小野寺幸子 (明星大学)

京都大学理学研究科附属飛騨天文台は岐阜県高山市上宝町の標高 1336m の大雨見山の山頂付近に 1968 年に開設された観測施設である。ここは市街地からは 10km 以上離れており街の光害の影響も少ないうえ、昼夜問わず天体観測には良い条件の場所であると考えられる。近年は国内における太陽補償光学の一大拠点となっており、北見工業大学や茨城大学との共同利用など盛んに活用されている。

今夏、明星大学と茨城大学の卒業研究として夜間のシーイングを測定したいとの提案を受け、共同利用として公開されていない 60cm 反射望遠鏡の整備を行った。この 60cm 反射望遠鏡は 1960 年に京都大学花山天文台に設置されていたものを飛騨天文台の開台に合わせて移設され、惑星、月、彗星のフィルム観測、激変星などの突発天体、恒星フレアなどの CCD 観測が行われてきた経緯がある。今回の観測ではこの 60cm 反射望遠鏡に浜松ホトニクス社製の高速 CMOS カメラ ORCA FLASH 4.0 を設置し、月の像を用いたシーイング調査を行う。

本講演では、この観測に向けた 60cm 反射望遠鏡の整備について、また、今後の 60cm 反射望遠鏡を含めた夜間の飛騨天文台の活用について議論する。